

# 早稲田大学国語教育学会に関する一考察

## －「早稲田大学における国語教育の研究」の一環として－

町田 守弘

キーワード：早稲田大学国語教育学会、時枝誠記、川副國基、遠望近視、早稲田大学国語教育学会会報、内容学、教育学

【要 旨】 早稲田大学教育総合研究所の2010年度・2011年度の一般研究部会である「早稲田大学における国語教育の研究」部会では、研究課題へのアプローチのために、1963年に設立された早稲田大学国語教育学会の活動に焦点を当てることになった。2年間の研究期間を費やして同学会の事務局が置かれた教育学部国語国文学科に保存された多くの資料を整理し、分析・考察を加えることによって、学会の歴史や特色の一端を明らかにすることができた。設立当初の目標でもあった教育現場における実践と大学における研究との交流という点を主要な特色として、同学会では例大会の開催と機関誌の発行を中心とした活動を展開してきたことになる。

同学会の初代会長には時枝誠記が着任し、例大会に積極的に参加して専門的な立場からの発言をするなど、常に学会をリードしてきた。時枝の後任となった川副國基もまた、同学会の発展に大きく貢献した。時枝、川副をはじめとした多くの先学の尽力によって、同学会は今日に至るまで発展を続け、早稲田大学における国語教育分野の発展に重要な役割を担ってきた。その事実は例大会案内に設けられた「遠望近視」と称するコーナー、および『早稲田大学国語教育学会会報』などからもうかがい知ることができる。

例大会の傾向を分析すると、発足当初から主として日本文学および日本語学に関わる教材研究の分野の研究が行われてきたことが分かる。一方、授業実践の報告など国語教育に関する内容は1980年代後半から盛んになり、2010年以降は全分野の中で最も高い割合になっている。1990年4月に早稲田大学に教育学研究科が新設され、国語教育を専攻する専任教員も着任した。このような専門的な研究環境が整備されたことも、同学会の国語教育関連テーマの充実と無縁ではない。

学会の最大の特徴として、教科の内容学としての文学・語学研究と教育学としての国語教育研究との交流、そして研究と実践との交流という点を指摘することができる。これがそのまま「早稲田大学における国語教育」の特色につながるものと思われる。

### 1. 研究の目的

本稿は、早稲田大学教育総合研究所の2010年度・2011年度の一般研究部会「早稲田大学における国語教育の研究」部会（以下「本研究部会」と称する）の活動報告を兼ねて、研究成果の概要について整理し論述したものである。なお本研究部会の構成員は、大貫眞弘、千葉俊二、丁秋娜（研究協力員）、林教子（特別研究員）、古井純士（特別研究員）、堀誠（2010年度研究代表者）、町田守弘（2011年度研究代表者）、松本直樹、吉田茂、李軍（研究協力員）の10名であった。

本研究部会の研究課題とした「早稲田大学における国語教育の研究」を進める際には、まず高

等師範部の話題から始めなければならない。1903（明治36）年、早稲田大学には国語漢文科・歴史地理科・法制経済科・英語科の4科から成る高等師範部が開設されて、ここに大学の組織としての教員養成の歴史が出發した。1949（昭和24）年4月、戦後の学制改革により高等師範部が教育学部に新生し、国語漢文科を前身とする国語国文学科が誕生して、開放性の教員養成のもとで教育に関わる人材の育成に取り組み始めた。1990年4月には大学院教育学研究科の開設にともない国語教育専攻が設置されて、多くの人材を育成輩出しつつ今日に至っている。

この間、1963（昭和38）年10月（以下は西暦のみ示すことにする）には研究と実践の融合を柱とする早稲田大学国語教育学会が組織されて、稲門教員の実践と研究を交流する場として機能してきた。同学会は2006から2007年度にかけての文部科学省採択の早稲田大学「ことばの力GP」の実施に当たっては、連携協力して教員の養成と資質の向上に貢献した。そして2012年1月には、第250回記念例会が開催された。

「国語教育」はことばの教育として、教育の根幹を担うものとも認識される。年来培われてきた早稲田大学における国語教育の歴史は、どのような歩みをもって、どのように展開をしてきたのか。その歴史の意味を明らかにすること、すなわち前述したような大学の教学史的な観点にも立って、早稲田大学における国語教育の展開を追跡・検証することを本研究部会の第一の研究目的とした。同時に、それは国語教育の諸課題を洗い出すことにほかならず、今日的な姿の解明と将来への問いかけの意味も含んでいる。その展望が第二の研究目的となった。

2年間という限られた期間における研究ということで、研究内容の拡散を防ぐために、本研究部会においては先述の早稲田大学の国語教育に関するいくつかの具体的な展開の中から、早稲田大学国語教育学会の活動に焦点化した研究を展開し、主として同学会の歴史に関わる研究を通して上記2点の研究目的にアプローチを試みることにした。

## 2. 主な研究内容

「早稲田大学における国語教育」を考える際に特に重要な活動として、学部・大学院における教育・研究活動とともに、地道な研究活動を展開してきた早稲田大学国語教育学会に着目しなければならない。本研究部会の活動が2年間という限られた期間の研究であることから、ある程度研究内容を絞り込んで効果的に進める必要があることを確認したうえで、早稲田大学国語教育学会（以下「同学会」と称する）の活動を中心に研究を進めることになった。これには、同学会が2013年に設立50周年を迎えることから、その歴史に関わる研究成果は学会にとっても有意義なものとして位置付けられるという判断もあった。本章では本研究部会の2年間の研究内容について、その概要を紹介することにしたい。

教育学部国語国文学科に設置されている同学会事務局には、学会の設立準備の状況が明らかになる文書、例大会の案内葉書、出席者名簿、発表資料等々の諸資料が残っていることが確認された。本研究部会の2010年度の活動では、これらの諸資料を閲覧のうえ整理・検討することを通して、学会の設立時期とその経緯等々が明らかにされるとともに、その折々の国語教育の研究動向や往時の会合の雰囲気その他を知ることができた。引き続き発見された資料類について、データ保管の観点からスキャナで画像ファイル化する作業に継続して取り組んだ。これは貴重な資料の

劣化を防止し、後々まで資料の内容を確認することができるように便宜を図るという目的にもよる。整理した資料を分析し考察を加えるという作業を通して、同学会の歴史の一端を明らかにできたことは、「早稲田大学における国語教育の研究」という本研究部会の研究課題へのアプローチに直結すると考えている。

2011年度の研究活動としては、第1回例会から第250回例会に至るまでの学会の例大会の内容を整理し、さらに機関誌や事務局の体制、研究部会の設立など、学会をめぐる様々な動向にも注目して資料のさらなる整理を試みた。これらを研究のための基礎資料として位置付けたうえで、様々な研究を展開することになった。時代の流れを大きく把握しつつ、学会で扱われた内容を分析・整理することにしたわけである。特に学習指導要領に関わる例大会の内容を整理するという活動を通して、学会が学習指導要領とどのように関わってきたのかを確認することもできた。

### 3. 早稲田大学国語教育学会の歴史の概要

ここで、同学会の歴史の概要を確認することにしたい。学会が設立されたのは、1963年10月のことであった。初代会長には時枝誠記が就任し、続いて川副國基、山本二郎、白石大二がそれぞれ会長を務めた。1982年からは代表委員制となり、初代表委員を榎本隆司が務めた。代表委員はその後、紅野敏郎、興津要、大平浩哉、梶原正昭、戸谷高明、中野幸一、堀切実、岩淵匡、小林保治、桑山俊彦、千葉俊二が担当し、2012年9月現在は町田守弘が担当している。

同学会の会則第三条によれば、この会の目的は「国語教育に関する研究、会員相互の親睦、並びに後進の育成をはかること」にある。また第四条には、その目的達成のために行う事業について、「1 大会・例会・研究会・講演会などの開催」「2 研究授業および授業参観」「3 機関誌の発行」「4 その他」とされている。

会員は、早稲田大学出身の公立および私立の中学、高校、大学の教員が多いが、例大会には学生や院生の参加も多い。第1回の例会が開催されたのは1963年の11月で、発表者は白石大二、題目は「語学教育と国語教育」であった。なお第2回例会はその翌月の12月に早稲田大学国語学会との共催で、両学会の会長である時枝誠記が担当している。1964年には合計8回の研究会が開催され、意欲的な研究活動が展開されている。その後毎年定期的に例会が開催され、研究発表とそれに基づく研究協議という形態を中心として、座談会やシンポジウム、および講演などの形態を加えながら今日に至っている。例会で取り上げられたテーマは、古文・漢文・現代文の教材研究および学習指導に関する広範な内容であり、学会構成員の層の厚さを物語っている。大学院教育学研究科における研究指導を受けて、2007年より秋の例会を「学生会員研究発表会」として、大学院生の研究成果を発表するという機会も設けられるようになった。

「研究会」としては、2012年現在「国語教育史と実践に学ぶ会」「古典教育研究会」「朗読の理論と実践の会」が活動を展開している。そして回数は少ないものの、会則第三条第2項にある「研究授業および授業参観」も実施された。さらに支部活動として「愛知県支部」が加わって、活発な研究活動が展開されている。

第3項に関して、機関誌としての『早稲田大学国語教育学会会報』が、1968年に創刊された。その後1981年3月には新たに『早稲田大学国語教育研究』が刊行されるようになり、毎年一号ず

つ定期的に発行され、国語教育に関する研究論文や実践報告、さらに会員の動向としての「現場からの報告」などが掲載されている。なお特に『早稲田大学国語教育学会会報』に関しては、例大会案内も含めて後述する。

以下の章では、同学会の歴史に関する特に重要な事項について、調査結果に基づいて具体的に紹介することにした。

#### 4. 早稲田大学国語教育学会の創設

先述のように、同学会が設立されたのは、1963年10月のことである。設立総会は1963年10月5日土曜日に開催された。この設立総会の案内状は、同年9月15日付けで設立世話人代表である川副國基の名前で出されている。その内容は以下のようなものであった。なお表記はすべて原文のままとした。

拝呈

秋涼の候いよいよ御清祥の御事と存じます。

さて、母校早大の国文科を卒業されて、中・高校の教職に就かれた方々は、まことに多数にのぼり、わが国語教育界の一大勢力となっております。

ところで、母校早大にも、時枝誠記先生、白石大二先生をはじめ、国語教育界の指導的地位にある方々を多数擁しておりますので、このあたりでひとつ、とりあえず東京中心ということになりますが、早大国語教育学会というものを結成し、母校の国文の先生方と現場の国語教育に挺身しておられる校友の方々との、親しい交流の上での研究をもちたいという気運が、盛りあがってきました。

つきましては、左記のような要領で学会の発会式および総会を持ちたいと存じます。研究と懇親との二つの意味で、皆さんふるって御入会下さって、今後月一回の例会にも、元気なお姿をお見せ下さるようにおねがいを申し上げます

敬具

設立総会は同年10月5日の14時から17時までということで、早稲田大学小野梓記念講堂で開催された。案内状によると、その議題として「会則審議」「会長・副会長・顧問・運営委員選出」「講演 早大教授 時枝誠記先生」とある。さらに「五時から大隈会館内校友会館で懇親会（会費三〇〇円）」という案内も見られる。また会費納入に関する依頼が書かれており、それによると設立時の年会費は100円となっていた。

総会で提案されたと思われる「早稲田大学国語教育学会会則（案）」は、第一条から第十四条までの条文と「付則」とから成っている。このうち「第三条」には学会の目的に相当する内容が盛り込まれた。それは「本会は、国語教育に関する研究、並びに会員相互の親睦をはかることを目的とする」という内容であった。先に引用した案内状の中にある「研究と懇親との二つの意味で、皆さんふるって御入会」という文言は、まさにこの「第三条」の目的と符合する。さらに「第五条」には会員に相当する規定となっているが、その内容は「本会は、国語教育に関心を有する早稲田大学の教員（旧教員を含む）・校友・学生およびそれらの紹介者をもって会員とする」であった。すなわち同学会は、単なる学術的な研究活動のみにとどまらず、早稲田大学出身の校友

の同窓会に相当するような交流の場としての機能も担うことを、設立当初から目指していたことになる。

いま一つ注目すべき点は、案内状にある「母校の国文の先生方と現場の国語教育に挺身しておられる校友の方々との、親しい交流の上での研究をもちたいという気運」である。すなわち同学会の設立当初の趣旨として、早稲田大学の国語国文学研究者と教育現場の国語教育担当者との「親しい交流の上での研究」が目指されていたことになる。この趣旨こそが、同学会の大きな特色として把握することができる。

設立総会において、会長として時枝誠記が着任することになった。時枝が同学会会長となった意味に関しては、榎本隆司が「老馬之智」（『早稲田大学国語教育研究・第30集』早稲田大学国語教育学会、2010.3）において以下のように指摘している。

（前略）時枝を会長に迎え得たことの成果・影響は大きい。ほとんど毎回と言っていいほどに例会に出席し、中・高の現場からの報告に耳を傾け、大学教員の発表に積極的に発言していた。それがどれほど会員の意欲を刺戟し、向上に資することになったか。いささかも構えることのない、平明・率直でかつ懇切な対応に、魅せられ、学んだことは大きい。

榎本の指摘によれば、会長に就任した時枝は「ほとんど毎回と言っていいほどに例会に出席し」、直接例会をリードしていた。時枝の発言は「会員の意欲を刺戟し、向上に資する」ものであったことから、同学会の活動を名実ともに支えていたものと思われる。

設立総会を受けて第1回の例会が開催されたのは1963年の11月9日のことであった。会場は当時の早稲田大学19号館大学院会議室で、発表者は白石大二、題目は「語学教育と国語教育」であった。この第1回例会の案内には、以下のような呼びかけの文章が見られる。

国語教育に関する研究ならびに会員相互の親睦を目的としてあらたに十月発足しました早稲田大学国語教育学会は、すでに会員二百名を越え、前記のように第一回例会を開くはこびになりました。まだ会員になっておられない方もお誘いあわせの上、ぜひ御参集下さいますようお願いいたします。

学会の趣旨に賛同して入会した会員が設立当時ですでに200名を越えていたという事実には、改めて注目しなければならない。それは、同学会が多くの関係者の支持を集めたことを物語っている。ちなみに2011年4月現在の会員数は504名である。

なお設立総会に提案された会則第二条では「本会の事務所は、早稲田大学教育学部内におく」とされているが、第1回例会案内では「早稲田大学教育学部川副研究室」となっている。設立時の世話人代表であった川副國基が、学会運営の中樞を担っていたことが明らかになる。

第2回例会はその翌月の12月14日に早稲田大学国語学会との共催で開催され、両学会の会長である時枝誠記が登壇している。会場は第1回と同様早稲田大学19号館大学院会議室、時枝の演題は「たどりよみ方式鑑賞はありえない」であった。この例会の案内には「討論会形式による」と注記されており、「参考文献」として「国語と国文学」（昭和38年6月号 時枝氏の論文）および『文章研究序説』が挙げられていた。まさに時枝会長自らが独自の学説を明らかにしつつ、参会者とともに研究を深めるという姿勢を見ることができる。

設立の翌年である1964年には、合計8回の研究会が開催され意欲的な研究活動が展開されてい



る。その後毎年定期的に例会が開催され、研究発表とそれに基づく研究協議という形態を中心として、座談会やシンポジウム、および講演などの形態を加えながら今日に至っている。

## 5. 「学会短信」「遠望近視」『早稲田大学国語教育学会会報』について

本研究部会では、同学会の事務局が置かれた教育学部国語国文学科学に保管された、学会に関する資料の収集と整理を実施した。特に紙媒体の資料の劣化が進んでいることから、学科に残された諸資料をデータとして保管する作業に取り組んだ。その際にデータとして整理した資料の一つとして例大会案内の葉書がある。例大会の開催通知は当該例大会の研究発表の題名、発表者、開催日時・開催場所等の情報が盛り込まれる。その例大会案内は2段組みで印刷されたが、その下段に「学会短信」というコーナーが設けられたのは、本研究部会が発掘した資料では1966年5月の例会の案内からのことであった。それは初め例会の報告や事務連絡が中心になっていたが、1967年11月例会案内の「学会短信」で同年逝去された時枝誠記会長への「哀弔」を榎本隆司が寄せている。続く同年12月例会の案内では田島一夫が短いエッセイを寄せて、国語教育に関わる話題をしたためている。それ以後、例会案内葉書の下段の「学会短信」では、会員が交代で国語教育に関わるエッセイを寄せることがあった。ただし1970年10月の例会案内で昆豊が寄せて以来、1982年7月の案内で新たに「遠望近視」欄が設けられるまで、「学会短信」は事務的な連絡が中心であった。

学会の例大会案内の葉書は2段組みで印刷されたが、その下段を使用して「遠望近視」と称されるコーナーが初めて設けられたのは、1982年7月開催の123回例会案内においてのことである。第1回の「遠望近視」を執筆したのは榎本隆司であった。同年開催された大会で、榎本は学会の代表委員に選出されている。このときから「会長」の名称を用いずに「代表委員」の名称を用いようになり、榎本は初代代表委員を務めることになった。この「遠望近視1」において榎本は、「現場での実践と研究との接点に立って、国語教育の多様な課題を考えてゆこうというのが本会の目的であり特色だ」と、本学会の目的および特色を明らかにしている。

「遠望近視2」は金子大麓によって書かれている。金子は黙読偏重の時代の中で朗読が学習指導要領で取り上げられたことに言及し、「朗読の必要性を最も早く主張されたのは坪内逍遙先生である」と述べている。まさしく「早稲田大学における国語教育」の話題に直結する貴重な話題提起になった。以下「遠望近視」は、鈴木醇爾、橋本喜典、白石大二、佐野齊孝らによって書かれた。国語教育に関する多様な話題が取り上げられている点が、最大の特色と言えよう。例大会案内を受け取った会員は、この「遠望近視」によって国語教育に関する最新の話題を執筆者と共有することができ、様々な示唆を得たものと思われる。学会誌とあわせて、例大会案内の「学会短信」そして「遠望近視」欄にも注目しておきたい。

同学会の機関誌として、『早稲田大学国語教育学会会報』（以下「会報」と称する）が発行されたのは、1968年2月のことである。第1号は4ページで構成されているが、その1ページ目に川副國基が「時枝先生と早大国語教育学会」というエッセイを寄せている。時枝誠記の人となりを伝えつつ、前年10月に逝去した時枝を偲ぶ内容であった。時枝が初代会長に着任したことから、「先生の御指導のおことばだけを聞くために参会した人も多かったのではないかと思います」という

川副のことは、同学会における時枝の影響の大きさを物語るもので、先に引用した榎本隆司の「老馬之智」の指摘にも通ずる内容である。続く2ページ目には、白石大二の「学問と教育実践との接点―時枝誠記先生の一つの思い出」が収録されている。ここで白石は、学会の重要な特質について、例会発表の内容から「実践と学問とが接合した発表会は、おそらくどこにも見られない学会の姿」と評している。この「実践と学問との接合」こそが、本研究部会が取り組んだ「早稲田大学における国語教育」の一つの特色であった。その点を象徴するかのよう、会報1号には、山崎正之の「古典の現代語訳―三重吉『古事記物語』をめぐる」と久米芳夫「ひとりごと」および中村徳治の「評価の方法に悩む」がそれぞれ収録されている。山崎の文章は「学問」を話題にし、久米と中村のものは「実践」を話題にしている。

『会報』の第2号が刊行されたのは1968年6月のことである。第1号にすぐ続けての発行という事実は、当時の会員および役員の情熱を物語る。同年は4月、5月、6月と続けて例大会が開催されている。その内容がすべて『徒然草』に関わるものであったことから、同時期に発行された『会報』第2号でも『徒然草』が特集されていた。この号もまた「実践と学問との結合」が意識され、それぞれに関わる内容のエッセイがそれぞれ収録された。

『会報』の第3号は1968年9月に発行されている。この号では、「ローカル通信」のコーナーが設けられ、茂木照夫が「岩手の人々」の一文を寄せている。このことは、同学会が会則に「本会は、国語教育に関する研究、並びに会員相互の親睦をはかることを目的とする」と謳われたことを受けている。すなわち会則後半の「会員相互の親睦をはかる」という目標を実現するためのコーナーとしての役割が期待されたものと思われる。なおこの「ローカル通信」は、第4号で山口毅が執筆したものの、それ以後は途切れた形になっている。それに代わって、1969年12月に発行された第6号（第6号と表記された『会報』が2回連続して発行されているので、実際には第7号）からは「職場通信」というコーナーが設けられた。ただしこのコーナーも単発的なものであった。この点からは、『会報』の編集方針が様々な形で模索されていたことが想像できる。

1973年12月に発行された第12号からは、『会報』の形式も整って、早稲田大学高等学院と早稲田実業学校に在職する会員が、交互に編集するというシステムが整ったように思われる。第13号巻末の「彙報」においては、原稿募集の案内が見られるが、そこに会員からの投稿を促すメッセージがあり、その中には「職場だより」や「ローカル通信」を募集する旨が書かれていた。これまでの『会報』に登場したコーナーを振り返りつつ、原稿募集をしている点に注意しなければならない。そして本研究部会で確認できた『会報』は、第15・16合併号までであったが、例大会案内の情報によれば、実際には1979年に発行された第17号まで続いたとされている。

『会報』に収録された原稿は、内容によって以下のように分類できる。

- ①日本文学および日本語学に関するもの。
- ②国語教育実践に関わるもの。
- ③近況報告など、会員相互の親睦を深めるのに資するもの。
- ④例大会の研究発表内容に関するもの。
- ⑤発表者および原稿募集、さらに事務的な内容に関するもの。

これらは同学会の機関誌の内容としていずれも貴重なものであり、1981年に学会誌『早稲田大

『学国語教育研究』として刊行されるようになってからも、引き継がれている。また執筆者には早稲田大学の専任教員が積極的に原稿を寄せていたことも特記すべき特色である。また『会報』第1号に白石大二が書いた「実践と学問との接合」という点は、『会報』を貫く重要な特色であったと言えよう。そしてその特色は『早稲田大学国語教育研究』にも引き継がれ、今日に至っている。

## 6. 例・大会の開催とその内容をめぐって

1963年の発足以来、2012年1月まで250回もの例大会が開催されてきた。また『早稲田大学国語教育学会会報』が刊行され、それを受け継ぐ形で発刊された機関誌『早稲田大学国語教育研究』も2012年3月には32集が刊行されている。そこで本章では、例大会における研究発表・講演の題目や、シンポジウムのテーマ、また機関誌等に掲載された論文・実践報告を概観し、年代ごとに分野別の傾向があるかどうかを見定めてみたい。そして、それを一つの指標としながら、早稲田大学における国語教育の歴史の一端を見てゆきたい。

例大会の内容に言及する前に、年間の回数について取り上げる。なお以下は「年度」を単位として考えることにする。同学会が発足した1963年度には3回開催されている。第1回が開催されたのが11月ということで、この回数は決して少ないものではない。翌1964年度には、9回の例大会が開催されている。開催月は、4月、5月、6月、7月、9月、10月、11月、1月、2月で、合計9回開催された。このうち6月には大会が開催され、11月例会では「教育実習の体験と今後の課題」というテーマで、教育実習を体験した教育実習生5名が発表者となっている。

1965年度には年間6回の例大会が開催されている。このうち6月は大会で「受験と国語教育」というシンポジウム、そして7月には「国語教育の型」というテーマで座談会が企画されていた。続く1966年度には合計8回の例大会が開催され、7月には「現時国語教育界の問題点一わが会の課題をさぐりつつ」というテーマで座談会が実施されている。年度内の開催日数を調べてみると、年間の開催回数は1978年度までは6回から8回が多く、1979年度からは年度内には4回から5回の開催という状況であった。年度内4回開催という形態が多く、開催月は4月、6月、10月（もしくは11月）、1月（もしくは12月）であることが多く、この中で6月には大会が開催される年度がほとんどである。この形態はその後長く続いて、2012年現在に至っている。

続けて例大会の発表内容を見てみると、発足当初から安定的に日本文学および日本語学に関わる教材研究の分野の研究が行われてきたことが分かる。日本文学研究に関する内容では、古典教育（古文と漢文）と現代国語（現代文）の研究がバランスよく、ほぼ同じ回数でなされてきた。教科書に採用される教材の数や授業時数においては、おおむね「現代文」が「古典」を上回る形態であり、さらに実際の授業時数や大学入試問題で「漢文」の比率が著しく低下してきたことを勘案すると、古典教育の重視が本学会の特徴の一つであると見ることができるだろう。このような教科の「内容学」としての文学・語学研究の活性化は、そのまま「早稲田大学における国語教育」の主要な特色の一つと見ることもできよう。

一方、授業実践の報告など「教育学」に直接関わる研究は、1980年代後半から盛んになり、2010年以降は全分野の中で最も高い割合になっている。1990年4月に早稲田大学に教育学研究科が新設され、まず修士課程が発足し、続いて1995年4月には博士後期課程が加わるようになった。



国語教育を専攻する専任教員も着任した。このような国語教育に関する専門的な研究環境が整備されたことも、同学会の国語教育関連テーマの充実と無縁ではない。とりわけ2007年10月に第1回学生会員発表会が開催され、以後毎年同時期に開催されているという実態は、大学院教育学研究科と本学会との交流を物語っている。

同学会の事務局が置かれた早稲田大学教育学部国語国文学科の専任教員は、全員が同学会会員となり、学会の活動に様々な形で関わってきた。ちなみに先に挙げた代表委員はすべて国語国文学科の専任教員であった。そして定年退職時の「最終講義」を、本学会での講演として実施することもあった。また新規着任教員は、同学会の例会での研究発表をすることも慣例となっている。このように、同学会と教育学部国語国文学科との関連という観点もまた、例大会の内容の展望に必要なものである。

続いて例大会の内容を確認すると、かつては学習指導要領の改訂を正面から扱った研究はほとんど見られなかった。ところが1978年9月の例会で、山崎賢三が「多様化時代の教育課程－新学習指導要領について」と題する研究発表をしてからは、1989年の改訂時から学習指導要領に関するテーマが例大会で扱われるようになった。1989年7月の大会では「学習指導要領の改訂をめぐる」という研究テーマが設定され、藤原宏の「啓蒙—文化—社会—個人」と題する講演と、学外から直接学習指導要領の改訂に携わった文部省の国語教科教科調査官北川茂治を招いて、「〔言語事項〕の指導と『現代語』」と題する講演が実施された。また1992年9月の例会では、大平浩哉が「新課程の国語科教育と授業の改善」と題して講演をしている。さらに大平は、1998年1月の例会で、最終講義を兼ねた「国語教育改革の課題」と題する講演において、学習指導要領の話題に触れている。

2008年・2009年の学習指導要領改訂に際しては、2年連続して大会シンポジウムのテーマとして取り上げられている。すなわち2009年6月の大会では「伝統文化の教育とは何か—新「学習指導要領」をめぐるシンポジウム」という研究テーマが設定され、学外からは文部科学省の国語教科教科調査官の富山哲也が招かれた。翌2010年6月の大会でも「新学習指導要領を見据えた『言語活動』」というテーマのシンポジウムが開かれて、学習指導要領の作成協力者を担当した高木まさきが登壇した。このように学習指導要領に改訂に伴う研究テーマが設定され、研究発表、講演、そしてシンポジウムが展開されてきたという事実は同学会の新しい傾向として認めることができる。

本章で概観した同学会の例大会の動向を通して明らかになったのは、文学研究・教材研究と国語教育とが両立する形で、学会を支えてきたという事実にはかならない。この事実は、早稲田大学において教科の「内容学」としての日本文学、中国文学、日本語学研究から自立して、「教育学」が一つの研究分野としての確固たる地位を獲得したことを示すものと言えるだろう。

## 7. 総括と今後の課題

本研究部会では「早稲田大学における国語教育の研究」を研究課題として設定し、2010年度、2011年度の2年間にわたって部会としての研究活動を展開してきた。すでに触れたように、研究課題が広範囲に及ぶことから研究の拡散を避けるために、「早稲田大学における国語教育」の一

翼を担ってきた早稲田大学国語教育学会に焦点を当てることになった。同学会の歴史をたどりながら、「早稲田大学における国語教育」の展開について具体的な資料に即して考察を加えてきた。同学会の事務局が置かれた早稲田大学教育学部国語国文学科には、学会の歴史に関わる資料が多く保存されていることから、まずこの資料を整理する必要がある。本研究部会では劣化した資料を含めてスキャナで読み取って、CD-ROMに保存するという作業にも従事した。その資料を閲覧し分析・考察するという地道な作業を続けることになった。その結果特に重要と判断した内容を精選して、本稿では報告したことになる。

第4章で引用したように、同学会の設立に際しては「母校の国文の先生方と現場の国語教育に挺身しておられる校友の方々との、親しい交流の上での研究をもちたいという気運」が主要な基盤であった。これは換言すれば、「研究」と「実践」との交流が目指されていたということにもなろう。同じ趣旨は、第5章で紹介した「遠望近視1」の「現場での実践と研究との接点に立って、国語教育の多様な課題を考えてゆこうというのが本会の目的であり特色だ」という榎本隆司の指摘につながってくる。同じ章で続けて紹介したのは、『会報』の第1号における白石大二の「実践と学問とが接合した発表会は、おそらくどこにも見られない学会の姿」という指摘であったが、この白石の指摘もまったく同じ内容と言えよう。すなわち、教育現場での実践と大学での研究を結ぶ場所として同学会が位置付けられ、それを目指して着実に歴史を積み重ねつつあるというのが同学会の大きな特色となっている。

同学会の事務局には例大会のレジュメ・資料もある程度保管されていることが確認できた。2年間の本研究部会の活動では十分に分析ができなかったことから、今後の課題の一つはそれらの資料を丹念に分析し、より具体的に同学会の内容を明らかにするという点である。また今回の研究活動ではほとんど触れられなかった学会誌『早稲田大学国語教育研究』の内容に関しても、さらに追究する必要がある。同学会は2013年に設立五十周年を迎えることから、今後は本研究部会の研究成果を生かしたさらなる研究を深める必要性も指摘できる。

繰り返し述べるように、同学会の最大の特徴として、教科の内容学としての文学・語学研究と教育学としての国語教育研究との交流、そして研究と実践との交流という点を考えることができる。これがそのまま「早稲田大学における国語教育」の特色につながるものと思われる。

本研究部会の研究課題は「早稲田大学における国語教育の研究」であった。本稿で報告したように、今回はその課題の一端として早稲田大学国語教育学会の活動を分析の対象とした。その他様々な観点から、この研究課題へとアプローチが試みられなければならない。なお、この研究課題に関する主な先行研究としては、早稲田大学大学史資料センター編『CD-ROM版・早稲田大学学術研究史』(2004.4)、および『早稲田大学国語教育研究・第30集(特集・早稲田の国語教育)』(早稲田大学国語教育学会、2010.3)がある。

【付記】 本論文は早稲田大学教育総合研究所研究部会(B-3)「早稲田大学における国語教育の研究(代表:堀誠(2010年)、町田守弘(2011年))」(2010-2011年)の研究成果の一部である。